第十二回　熊本大学附属図書館特殊資料展

『永青文庫』の文学書

【出品目録】

平成七年十一月三日～五日

熊本大学附属図書館

公開講演会

講師　熊本大学文学部教授　荒木　尚氏

演題　『永青文庫』の文学書

日時　平成七年十一月三日（金）十三時三十分～十五時

場所　附属図書館会議室

一、俊成卿定家卿両筆　一軸

鳥

やどになくやごゑのとりハしらじかし
おきてかひなきあか月のつゆ

朝綱卿詩云

家鶏不識官班冷　依旧猶催報暁声

きみがよにかすみをわけしあしたづの
さらにさわべのねをやなくべき

てなれつゝすゑのをたのむハしたかの
きみのみよにぞあハんとおもひし

文治之比、禁裏御壷被飼鶏、以近臣
被結番、供奉其事　長房 信清 範光
依之詠之　保家 定家

鴈与鶯之間
一ヲ可得心歟
鶯可
勝歟
いかにせんつらみだれにしかりがねの　行　乱
たちどもしらぬ秋のこゝろを
わがきミにあぶくまがハのさよちどり
かきとゞめつるあとぞうれしき

鴈千鳥已停止候云ゝ、然而此二首
殊大切思給候、此外凡可構出とも
不覚候、制仰たゞそらしらず
してや候べからむ

内府哥
述懐多リキ
凡以述懐題被止題ニ、述懐之心
詠之、旁雖有其憚、此鳥題凡
一切不可叶候之間、如此詠候、又偏以挟事
為先者、為道遺恨候之故也

掛幅装の一軸。タテ二九・五糎、ヨコ四九・七糎。正治二年（一二〇〇）の院初度百首への詠進に際し、八月二十三日の夜から二十四日の午前中にかけての間に、俊成・定家父子のあいだにあわただしく交わされた勘返状の一部である。

この掛幅については、「忠興公御家譜」のなかに「俊成定家両筆従　家光公寛永十六年十一月拝領」とある。『寛政重修諸家譜』には「（寛永）十六年十一月十九日、また御手づから点茶を賜ひ、事終りてのち俊成・定家両筆の一軸と宋の無準が墨跡とを掛をかれ、此二軸は常に愛玩せさせ給ふといへども、好みに応じてその一をたまはるべきむね恩命あるにより、こふて両筆の一軸を拝賜す」とあり、また『徳川実紀』にも「十九日、細川忠興入道三斎帰国の辞見し奉り、五条三位俊成卿・京極中納言定家卿両筆の書幅を御てづから給はる。（中略）先朝の御時すでに金渡の墨跡をたまはれば、こたびは仮名を下されんとて、かの両筆の一軸を給はりけり」とあり、『綿考輯録』忠興（巻二十四）にも詳しい記述があって、伝来の経緯を知ることができる。

二、題不明（端作「源氏衣色目四季月々の事」）

一冊

整理番号一〇〇・一二・一〇七

（奥書）右一冊者一条殿御説也是源氏悉
相伝之上書渡儀也雖然任御懇望
進候処如件
文明十五年三月日　　堯恵
長岡兵部太輔殿
進之候

三、豊後風土記

一冊

整理番号　一〇七・三六・六

風土記は古代官撰の地誌で、諸国の地方の由来・土地に伝わる伝承・産物などについて郡単位にまとめている。和銅六年（七一三）詔命を受けて編述された。その大部分は現存せず、常陸（ひたち）・播磨（はりま）・出雲・豊後・肥前の五風土記だけが今に伝わっている。永青文庫本は幽斎近侍の臣佐方宗佐の書写で、文禄三年（一五九四）幽斎が奥書を加えている。現存伝本中、書写年紀を明らかにする最古の善本である。

四、伊勢物語

一冊

整理番号　赤二一六・一七

平安時代前期の代表的な歌物語。永青文庫には七点ばかりの『伊勢物語』が蔵されており、尊重されていたことが知られる。本書は本文の行間に多くの細筆書入れがあり、二条家注の旧注を広く取り込んでいて注目される。箱書によれば、本文・細注ともに一条関白兼良（かねら）（一四〇二―一四八一）の筆とされ、秘襲されてきたもの。

五、古今和歌六帖

六冊

整理番号一〇七・三六・四

詠歌の手引書として編まれた平安時代の類題和歌集。若菜・卯の花・七夕などから恋・祝・服飾・動植物などに分けた五〇〇余りの歌題のもとに四千五百首を集めている。現存する伝本はすべて藤原定家の本を転写した同系統の本であるが、本書を除いてすべて近世の写本である。奥書によれば、文禄四年（一五九五）世尊寺行能筆の禁裏本を幽斎と数人の門下が写したもの。

六、歌合類聚

細川幽斎は俊成・定家の遺訓を知るために歌合の収集を願っていたが、その願いが後陽成天皇の知るところとなり叶えられた。慶長五年（一六〇〇）幽斎は禁中の歌合類四十四種を借り、毎日のように門弟の手を借りて書写した。その奥には

以　勅本奉書写校合訖

慶長五年仲夏仲(下)澣　玄旨（花押）

と幽斎の署名があり、永青文庫に一括蔵されている。その中から十種を展示する。

○ 天徳歌合

一冊

整理番号　一〇七・三六・七

天徳四年（九六〇）三月、村上天皇が清涼殿で催した十二題二十番の歌合。宮廷行事として確立したもので、晴儀歌合の規範とされた。

○ 広田社歌合（ひろたのやしろ）

一冊

整理番号　一〇七・三六・七

承安二年（一一七二）十二月、摂津国広田社社頭で催された歌合。三題八十七番。俊成が判詞を記した。

○ 御裳濯河歌合（みもすそ）

一冊

整理番号　一〇七・三六・七

西行が旧作中から七十二首の秀歌を自撰、三十六番に番えて伊勢の内宮に奉納した自歌合。藤原俊成の判。

○ 宮河歌合

一冊

整理番号　一〇七・三六・七

御裳濯河歌合と対をなす西行の自歌合。七十二首三十六番。前者と同様に生涯の総決算として秀歌を自撰結番し、伊勢の外宮に奉納した。藤原定家の判。

○ 日吉歌合

一冊

整理番号　一〇七・三六・五

「慈鎮和尚自歌合」とも。慈円が日吉七社に奉納した各社十五番総計百五番の自歌合。俊成の判詞は和歌についての俊成見解を端的に示したものとして重要。本書は最善本。

○ 御室撰歌合（おむろ）

一冊

整理番号　一〇七・三六・七

鎌倉時代の歌合。「守覚法親王家五十首」から撰歌して結番した歌合。俊成が当座の雰囲気を伝えるよう配慮して判詞を記している。

○ 老若歌合（ろうにゃく）

一冊

整理番号　一〇七・三六・五

老若五十首歌合（内題）。建仁元年（一二〇一）後鳥羽院が主催した歌合。出詠歌人の年齢によって左方（老）、右方（若）に分けて結番したもので、二百五十番から成る。衆議判らしく判詞はない。

○ 百番歌合　定家卿

一冊

整理番号　一〇七・三六・七

藤原定家の自歌合。貞永元年（一二三二）ごろ改訂したものであるが、禁裏本を転写した伝本としては現存唯一の伝本である。定家が自詠二〇〇首を選出して結番したもので、自歌に対する定家の好尚を知ることができる。

○ 時代不同歌合

一冊

整理番号　一〇七・三六・七

後鳥羽院撰の歌仙歌合。八代集の歌人一〇〇人の秀歌各三首を時代の古新により左右に分け、百五十番に番えたもの。

○ 遠島歌合

整理番号　一〇七・三六・七

承久の乱（一二二一年）によって隠岐に遷幸された後鳥羽院が催した机上の歌合。都の藤原家隆に命じて一五名に各一〇首を詠ませ、院自ら結番して判詞を加えている。

七、新撰万葉集

一冊

整理番号　一〇七・三六・六

「菅家万葉集」ともいい、菅原道真の撰と伝える平安時代の私撰集。万葉仮名書きの和歌と和歌に対応させた漢詩から成り、古今集成立前夜の和歌復興を示す所産として注目される。本書は中院通勝と雄長老が書写し幽斎が奥書を加えている。原撰本系統唯一の完本として貴重である。

八、新勅撰和歌集

二冊

整理番号　一〇八・五・六

藤原定家が撰進した第九代の勅撰和歌集。二〇巻。本書は和歌排列の手直しや文字の削改のあとを多くとどめ、撰進過程をうかがわせる一本である。定家の自筆本と伝えて細川家に秘襲されてきたもの。

九、百人一首注

一冊

整理番号　一〇八・五・一〇

藤原定家撰の小倉百人一首は室町時代に二条家歌学で重視され、多くの注釈書が著わされた。幽斎も師説（三条西実枝説）を中心に先注を取捨して「百人一首抄」をまとめ、後世に大きな影響を与えたが、本書はそれに先立つ撰述として注目される自筆本である。

十、新古今集略注

一冊

整理番号　二五・赤・二〇二

内題「新古今集聞書」。東常縁・素純父子によって著わされた『新古今集』の最古のまとまった注釈書。本書はその原撰本の本来的な形態を忠実に伝えるものとして注目される伝本。幽斎筆と伝えて秘蔵されてきたもの。

十一、詠歌大概抄・秀歌大略抄

各一冊

整理番号　赤・二一〇・九〇

藤原定家が著した歌論書『詠歌大概』について、三光院内府（三条西実枝）の講釈を幽斎が天正十四年（一五八六）にまとめたもの。『詠歌大概』は漢文体の歌論と一〇三首の秀歌例を挙げた「秀歌之

躰大略」とから成り、小倉百人一首などとともに尊重された。本書は幽斎自筆として伝来、幽斎が後年推敲（すいこう）する前の原初的形態を伝える伝本として重要な本である。

十二、歌枕名寄（うたまくらなよせ）

十五冊

整理番号　一〇七・三六・八

鎌倉・南北朝期の名所歌集。勅撰集・私撰集・歌学書など多くの歌書から歌を集めて、歌枕および例歌を山城以下の国別にまとめたもので、地名別の和歌集大成となっている。本書は幽斎以下数人が書写、原初的形態をもつ伝本として注目されるもの。

十三、夫木抄（ふぼくしょう）

十九冊

整理番号　一〇七・三六・三

鎌倉後期、二条・京極・冷泉三家の抗争期に、冷泉為相の門弟であった勝間田長清が撰んだ類題和歌集。三十六巻五九六題、一万七千余首を収める。永青文庫本は他の諸本とかなり相違して注目される写本である。

十四、幽斎公三斎公御筆謡本

十冊

整理番号　一〇八・五・一六

観世流の謡本で、稲舟・安古木・高砂・小袖曽我など一〇番から成る。観世座のワキとして業績のあった観世小次郎元頼の奥書をもつ由緒正しいテキスト。箱書によれば、幽斎・三斎の書写になるものという。

十五、太鼓秘伝抄（たいこひでんしょう）

一冊

整理番号　一〇七・三六・六

能の太鼓の名手であった幽斎が文禄二年（一五九三）に弟子の小崎彦次郎に相伝した太鼓の秘伝書。幽斎の太鼓の師匠であった観世座の名人観世与左衛門国広伝書の忠実な転写本である。

十六、源氏物語　季吟筆

五十四冊

整理番号　三七・赤・二〇四

奥書によれば、元禄七年六月、七十一歳の北村季吟が書写したもの。異本との校合を若干加え、「夢の浮橋」本文第二丁表より墨と緑・赤・朱・藍・金・銀の文字を一行ごとに交えて写している。北村季吟（一六二四ー一七〇五）は俳人・歌人・歌学者。晩年幕府歌学方として柳営歌壇の指導に当り、「源氏物語湖月抄」「枕草子春曙抄」「八代集抄」など多くの注釈書を著わした。

十七、平家物語

三十六冊

整理番号　三〇番甲乙・赤・二一五

軍記物語の最高傑作。異本が多く、また『太平記』など以後の軍記物語や謡曲・浄瑠璃・歌舞伎など芸能にも大きな影響を与えた。本書は江戸時代中期写の奈良絵本で貴重な伝本である。